



筑紫女学園大学リポジット

結果構文とカテゴリー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-12-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/926

結果構文とカテゴリー

緒 方 隆 文

A Categorical Approach to Resultative Constructions

Takafumi OGATA

1. はじめに

結果構文は、これまで数多くの研究がなされてきた(Simpson 1983, Carrier and Randall 1992, Goldberg 1995, Levin and Hovav 1995, Wechsler 1997, Washio 1997, 高見・久野 2002, 影山 1996など)。統語論的分析、統語的意味的分析、語彙意味論的分析、構文文法による分析、認知文法による分析など、アプローチも多様である。本稿では意味的分析を行う。具体的には、カテゴリー分析を通して結果構文を考察する。カテゴリー分析とは、構文の意味をカテゴリースキーマで表記し、構文の意味の広がりや適格性を説明する方法になる。ここでの結論は、結果構文は構文全体として〈出現〉〈移動〉の意味を持つと主張する。そしてこの2つの意味は、変化対象と結果状態が存在構造をなすことからくるとする。カテゴリー分析で、結果構文の特性やふるまいが明らかになると主張していく。

結果構文には、他動詞と自動詞の両方の構文がある。他動詞では、動詞が目的語を選択する(1)のタイプ(選択目的語)と、動詞が目的語を選択しない(2)のタイプ(非選択目的語)がある*1。(1)のタイプでは、結果は動詞の意味から自然に予測されるが、(2)のタイプでは、予測されにくい。また(1)では結果述語がなくても適格だが、(2)では結果述語がないと非文になる。

(1) a. I painted the car yellow. b. I cooked the meat to a cinder. (Simpson 1983: 143)

(2) a. She wiped the dust off. (影山 1996: 246)

 b. He broke some grapes off the branch. (鈴木 2013: 114)

次に自動詞の場合、擬似目的語をとるもの((3))と、目的語を全くとらないもの((4))がある。

(3) a. I laughed myself sick. b. I danced myself tired. (Simpson 1983: 145)

(4) a. The icecream froze solid. b. The butter melted to a liquid. (Simpson 1983: 143)

(3)のタイプでは再帰代名詞などの擬似目的語をとる。目的語は非選択目的語であって、結果述語がなければ不適格となる。一方(4)のタイプでは、目的語がない自動詞表現になる。状態変化だったり、位置変化だったりする。(3)のタイプでは結果は、動詞の意味から自然に生じるが、(4)のタイプでは結果は動詞の意味からは予測しにくい。

結果構文は、他動詞か自動詞か、目的語が選択目的語か非選択目的語か、結果と動詞の語彙的意味の透明性、位置変化か状態変化かなど、様々な要因がからまり、複雑に見える。しかし結果構文は、動詞が表す行為によって何かが変化し、何らかの結果状態になることを示しているに過ぎない。結構構文としての意味、〈出現〉と〈移動〉をカテゴリースキーマで表記し、構文の適格性を説明していく。

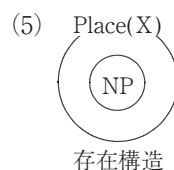
以下の構成は、まず2節でカテゴリー分析を二重目的語構文を通して見る。これは緒方(近刊)の概観になる。二重目的語構文は意味の広がりが大きく、結果構文を見るときに比較対象として適している。それと同時にカテゴリー分析そのものも概観していく。次に3節で意味のネットワークを見る。結果構文の〈出現〉と〈移動〉の意味は、独立して存在するのではなく、ネットワーク上で関連付けられている。このことを示すため、ネットワーク全体を概観する。4節で結構構文进行分析する。そこでは結果構文のスキーマを示すとともに、その特性を見る。最後に5節でSVOO文型を見ることで、結果構文との関連性を考察する。

2. カテゴリー分析と二重目的語構文

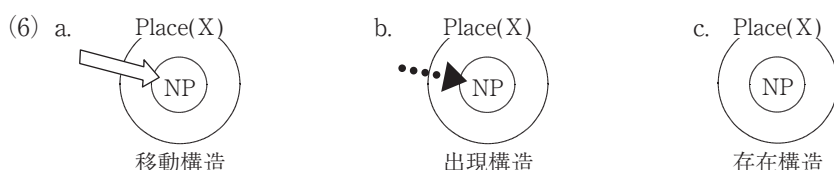
カテゴリー分析は、構文の意味をカテゴリースキーマで表記し、意味の広がりを出すことを目的とする。そしてスキーマに合致するか否かで、構文の適格性を説明する。カテゴリースキーマとは、カテゴリーと成員の関係で意味を表記したスキーマになる。

ここでは緒方(近刊)で行った二重目的語構文の分析を通して、カテゴリー分析を概観するとともに、結果構文との比較対象としたい。なおto与格構文のスキーマを、緒方(近刊)に追記している。

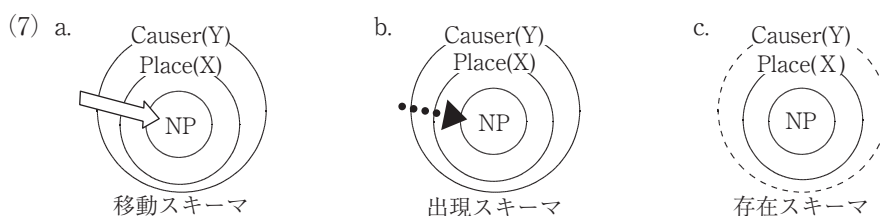
二重目的語構文(SVO₁O₂)は、その一部である二重目的語部分(O₁O₂)に意味がある。それをスキーマで示すと、(5)のように存在構造になっている。O₁が場所カテゴリー(Place(X))、O₂が成員として存在構造をなす。この存在構造に、動詞の語彙的意味が加わり、〈移動〉〈出現〉〈存在〉のいずれかの意味を持つと主張した。



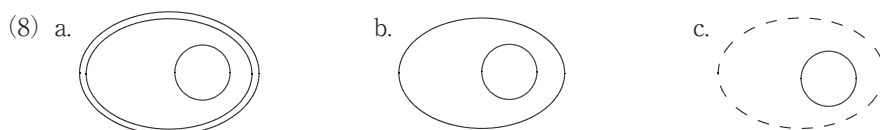
〈移動〉〈出現〉〈存在〉をスキーマで示したのが(6)になる。(6a)は〈移動〉で、他の場所にあったものが移動した結果として存在構造になる(中抜き矢印で表記)。(6b)は〈出現〉で、新たにまたは出所が不明なままカテゴリー内に出現した結果として存在構造になる(破線矢印で表記)。(6c)は〈存在〉で終始、存在構造であり続けるものをさす。



この3つの意味が出現するために、Causerである主語が関与する。主語が関与することを、(7)のようにカテゴリー関係で示す。つまり関与するものすべてが成員となり、集合体としてのカテゴリーをなすと考えた。そのため存在構造の外側に包み込むように、Causer カテゴリーがある。そして二重目的語全体として、〈移動〉〈出現〉〈存在〉の3つの意味を持つと主張した。



しかしよく見ると、主語である Causer の関わり方に違いがある。(7a,b)では実線であるが、(7c)では破線になっている。カテゴリーとその成員の関わり方、言い換えれば緊密度には基本3つあると考える。それを示したのが(8)になる。緊密度は、(8a)が強く、(8b)が普通、(8c)が弱くなっている。存在スキーマ(7c)において、Causer が破線になっているのは、存在構造に対して Causer は何の作用も起こさず、存在構造自体に何ら変化をもたらしなからである。すでに存在するものに緩く関わるにすぎない。そのため破線となっている。カテゴリーと成員の関わり(緊密度)が弱いことを示している。



具体例で示す。(9)が移動スキーマ、(10)が出現スキーマ、(11)が存在スキーマの例になる。

- (9) a. I carried Bill a six-pound ashtray. b. Sears delivered them the wrong sofa.

(Green 1974: 78)

- (10) a. Bill baked himself a cake. b. Mary burned John a steak. (Green 1974: 190, 92)

- (11) a. We envied John his good looks. b. We forgave John his good looks.

(Green 1974: 101)

(9)では動詞の行為により、ashtray が Bill に、sofa が them に移動することを表している。(7a)の移動スキーマの意味になる。(10)では動詞の行為により、himself に a cake が、John に a steak が出現することを表している。違う場所にあったものが移動してきたわけではない。(7b)の出現スキーマの意味になる。(11)では、John の中に good looks という特性が存在している。それに対して主語が、envy したり forgive したりしている。(7c)の存在スキーマの意味になる。

(7)であげたスキーマにより、次のふるまいが説明される。

(12) a. *John pushed Mary the box. b. John pushed the box to Mary. (加賀 2012: 53)

(13) a. *John opened Mary the door. b. John opened the door for Mary. (岸本 2001: 137)

(12a)では移動の意味を表すが、移動の後に存在構造がない。移動によって、Mary の中に the box は存在しない。単なる着点になっているにすぎない。そのためスキーマ(7a)と矛盾し不適格となる。一方(13a)では出現の意味だが、Mary に the door が出現しない。つまり存在構造が成り立たない。そのためスキーマ(7b)と矛盾し不適格となる。

次に与格交替について見ていきたい。与格交替とは、(14) (15) のような二重目的語構文と与格構文の交替をさす。(14)は to 与格交替、(15)は for 与格交替になる。

(14) a. I gave John a book. b. I gave a book to John. (Green 1974: 70)

(15) a. I bought John a book. b. I bought a book for John. (Green 1974: 70)

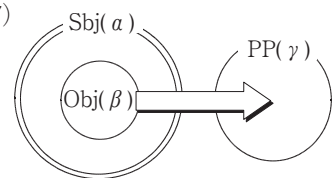
二重目的語構文と与格構文の決定的な違いは、その含意にある。二重目的語構文(SVO₁O₂)では、O₁がO₂を所有しているという含意がある。一方与格構文では、そうした含意がない。つまり両者には意味の違いがある。(16a)に示すように二重目的語構文では所有関係を否定できないが、(16b)にあるように与格構文では否定することができる^{*2, *3}。

(16) a. *John gave Mary a rose but she never got it.

b. He sent a package to Mary, but she didn't receive it. (Wierzbicka(1988: 366))

結果構文には、to 与格構文と同じスキーマを持つものがある。そのため to 与格構文のスキーマをここで見ていく。to 与格構文とは(14b)に示すように、対応する二重目的語構文の O₁が to 前置詞句になっているものを指す。

まず(17)に to 与格構文のスキーマを示す。to 与格構文の (17)
主語は、移動の結果に関与しない。関与するのは目的語の移動だけである。そのため主語カテゴリーは、目的語とその移動だけを包み込んでいる。また主語の関わりは、移動を引き起こすことから、強い関与になる。それを二重線で示してある。このとき to 与格構文は〈移動〉の意味を持つ。



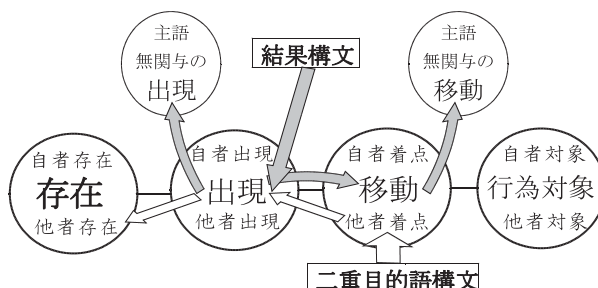
まとめると、二重目的語構文は内部に、存在構造を持ち、動詞の意味により、構文全体の意味として〈移動〉〈出現〉〈存在〉の意味を持つ。この意味をカテゴリースキーマで表記した。また二重目的語構文は、与格構文と異なることを示した。与格構文の主語は、存在構造が出現するかどうかに関与しない。そのため二重目的語構文とは異なる含意を持つことになる。

結果構文の場合、二重目的語構文と to 与格構文の両方のスキーマ((7)と(17))を持つこととなる。つまり主語は、存在構造の出現に関与する場合としない場合の両方がある。しかし二重目的語構文と同じように、共通して存在構造が鍵となる。ただし結果構文を分析する前に、二重目的語構文で見た〈移動〉〈出現〉〈存在〉の意味が、意味ネットワークをなしていることを次節で見ていく。

3. 意味のネットワーク構造

2節で二重目的語構文全体の意味として、〈移動〉〈出現〉〈存在〉があるとした。これらの意味は独立して存在しているのではなく、関連付いており、意味のネットワークの中に位置づけられる(緒方(近刊))。それを示したものが(18)になる*4。○が意味、□が構文または動詞の種類を表す。

(18)



(18)はモノの視点からのネットワークで、基本の意味は4つある。〈存在〉〈出現〉〈移動〉〈行為対象〉で、他動性の順に直線的に並んでいる。〈存在〉はある場所にモノが存在するという意味、〈出現〉はある場所にモノが新たに出現するという意味、〈移動〉はある場所からモノが移動するという意味、〈行為対象〉はモノが行為対象になるという意味になる。各意味はさらに自者と他者の2種類に分けられる。モノが自者または他者のどちらになるかは、構文や動詞で指定される場合がある。

二重目的語構文で言えば、〈行為対象〉以外の意味が可能で、[他者]が基本となる。具体的には、他者着点の〈移動〉を中心義とし、そこから〈出現〉(自者／他者両方含む)、他者存在の〈存在〉と意味が拡張している。つまり二重目的語の3つの意味は、関連付いており、意味の拡張の道筋になっている。拡張するにつれ、用例は少なくなる。別様に言えば、〈移動〉が典型性が高く、〈出現〉〈存在〉と拡張するにつれ、典型性は弱まる*5。

(18)には先回りして、結果構文の意味拡張ものをせてある。結果構文は〈出現〉を中心義として、〈移動〉へと派生する*6。〈出現〉では、変化対象に、結果となる属性が出現することを意味する。一方〈移動〉では、変化対象が、ある状態に向かって移動することを意味する。〈出現〉〈移動〉どちらも自者出現と他者移動の両方の意味がある。さらに〈出現〉〈移動〉から派生した意味で、主語が関与しない〈移動〉〈出現〉がある。いずれにせよ、結果構文もまた、二重目的語構文と同様に、意味のネットワーク上に、意味が位置づけられていると考える。詳細は次節に譲ることとする。

ここで注意しなければならないことがある。それは、構文に現れる動詞が、必ずしも〈存在〉〈出現〉〈移動〉〈行為対象〉の意味を持つとは限らないことにある。構文には、構文が持つ意味があり、いわば現れる動詞と、構文の意味が共同して、構文全体としての意味が定まる。そのため動詞本来の意味と、構文全体の意味にずれが生じる場合もある。例えば動詞本来の意味では(19a)に示すように、非完了的事態を表すが、それが結果述語が付加されると、完了的事態の意味が生じる。つまり語彙アスペクトの変換が起こる(三原(2014))。これは、構文全体の意味から導かれると言

える。

(19) a. The joggers laughed { *in/for } about two minutes.

b. The joggers laughed themselves into a frenzy { in/*for } about two minutes.

(三原 2004: 178)

(19a)では非完了的事態の for 句が適格となり、(19b)では完了的事態の in 句が適格となる。

ここでの意味拡張は、意味がネットワーク上に位置づけられ、ネットワーク上を通して拡張する。つまり線で結ばれた隣の意味へと拡張する。この意味の拡張は、従来のメタファーやメトニミーを使った意味拡張とは異なる。しかしだからといって、メタファーやメトニミーによる意味拡張を否定しているわけではない。共存関係にあると考える。

もっと言えば構文レベルの意味拡張には、(18)のような意味ネットワークが必要と考える。ここでは基本4つの意味しかない。そのため他構文との比較が容易になり、関連性も見えてくる。また同時に、その構文が持つ典型的な意味からの広がりも見えてくる。ネットワークを通して、統一的な意味拡張を説明することができると思う。

4. 結果構文

結果構文には、他動詞と自動詞の両方がある。他動詞の構文は、2つの基準で分ける。一つめは目的語が選択目的語か非選択目的語のどちらになるか、二つめは結果述語が前置詞句か否かで分ける。まず選択目的語をとる他動詞が(20)になる。結果述語が前置詞句以外なのが(20a)、前置詞句なのが(20b)になる。次に非選択目的語を目的語にとる例が(21)になる。結果述語が前置詞句以外なのが(21a)、前置詞句なのが(21b)になる。一方自動詞の場合、一つめに目的語をとるか取らないか、二つめに結果述語が前置詞句か否かで分けて考える。目的語を取る場合、擬似目的語になるため非選択目的語をとる。その例が(22)になる。結果述語が前置詞句以外が(22a)、前置詞句が(22b)になる。そして目的語を全く取らない自動詞構文が(23)になる。結果述語が前置詞句以外が(23a)、前置詞句が(23b)になる。最後に(24)は誇張表現となる。

(20) a. She pounded the dough flat as a pancake.

b. She pounded the dough into a pancake. (Carrier and Randall 1992: 183)

(21) a. She wiped the dust off.

b. He broke some grapes off the branch. ((= (2))

(22) a. They ran their sneakers ragged.

b. They ran their sneakers to tatters. (Carrier and Randall 1992: 183)

(23) a. The pond froze solid.

b. The pitcher smashed to pieces. (Carrier and Randall 1992: 218)

(24) a. The joggers ran the pavement thin. (Levin and Rappaport Hovav 1995: 53)

b. You shouldn't let him talk. He will talk your ear off. (影山 2001: 172)

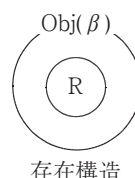
結論から言えば、結果構文の意味は大きく3つある。一つは〈出現〉で、(20a) (21a) (22a)のタイプがこれになる。二つめは〈移動〉で、(20b) (21b) (22b) (24)タイプがこの意味になる。三つめは、主語が関与しない〈出現〉〈移動〉の意味になる。(23)タイプがこれに相当する。この三つめの意味には、さらに、結果述語が主語を叙述するものも含まれることとなる(後述)。

結果構文では〈出現〉が基本義で、〈移動〉へと派生すると考える。そしてその両方の意味からさらに派生したものが、主語が関与しない〈出現〉〈移動〉の意味になる。ただ〈出現〉と〈移動〉の典型性はどちらも同程度と思われる。以下、意味ごとに考察していく。

4.1 〈出現〉の意味

〈出現〉の意味は、(20a) (21a) (22a)のタイプで現れる。目的語(擬似目的語含む)を取る用法で、結果述語が前置詞句でないものになる。〈出現〉は結果構文の基本的意味になる。

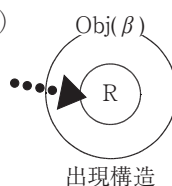
〈出現〉の意味では、二重目的語構文と同様、存在構造が関わる。存在構 (25)



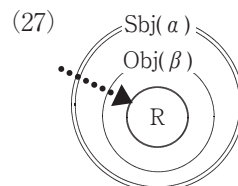
造を示したものが(25)になる。他動詞であれ自動詞であれ、目的語／擬似目的語がカテゴリーとなり、結果述語が成員となる。言い換えれば、目的語(カテゴリー)に、結果となる属性(R)が成員として存在する。

目的語と結果述語のどちらがカテゴリーになるかは、語順が関係している。カテゴリーが参照点として機能し、その成員にたどりつく流れが自然である。二重目的語構文では、前に現れる O_1 がカテゴリーとなり、後ろの O_2 が成員となった。これは前に現れる O_1 が参照点として機能したことを意味する。同様に結果構文でも、前に現れる目的語がカテゴリーとなり、後続する結果述語が成員となる。前に位置する目的語が参照点として機能している。

この存在構造をもとに、出現構造へと発展する。この場合出現したことで、結果として存在構造が生じる。スキーマを(26)に示す (cf. (6b))。



そしてさらにこの出現構造(26)に、主語が関与する。そのスキーマが(27)になる。(27)では、主語



が関わることを、二重目的語構文のときと同じように、カテゴリー関係で表記している。主語が動詞の行為により、出現構造に関与することを表す。また主語カテゴリーが二重線になっているのは、出現構造への関わりが、強いことを示している。

具体例を通して説明する。まず(28)のように選択目的語をとる他動詞構文がある。この場合、スキーマは出現スキーマ(27)になる。

- (28) a. He painted the house green. b. She washed herself clean.

(28a)でいえば、カテゴリー the house に結果属性 green が成員として出現する。この出現に、主語(he)が行為(painting)を通して強く関与する。主語と別のものに出現するので、他者出現になる*7。一方(28b)では主語と同じ herself に属性 clean が出現する。主語と同じものに出現するので、自者出現となる。

スキーマ(27)には、主語の強い関与が求められる。よって主語の関与が弱い場合、結果構文は不適格になる。(29)では道具が主語になっており、結果出現への関与が弱い。そのため不適格になる。

- (29) a. *The feather tickled her silly. b. *The hammer pounded the metal flat.

(Goldberg 1995: 193)

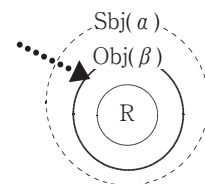
なお選択目的語を取る場合、動詞の意味から推察される結果が、生じる傾向にある。そのため影山(2001: 157-8)が述べるように、動詞と結果述語の組みあわせは、かなり慣習化されている。動詞の意味から推察される結果述語が現れることとなる。

次に(30)のように非選択目的語をとる他動詞構文がある。この場合結果述語は義務的で、目的語だけだと非文になる。

- (30) a. John shaved his razor dull. b. Fred cooked the pan black. (都築 2004: 94)

スキーマは選択目的語他動詞と異なり、(31)になる。(27)との違い (31)

は、一つに出現するものが結果述語ではなく、目的語カテゴリーが出現する。目的語カテゴリーは、結果となる状態(R)を成員として内包しているの、存在構造ごと出現することとなる。もう一つの違いは、主語の関与が弱いことにある(破線表記)。出現する結果は、動詞の意



味から自然に導かれるものではない。主語の動作によって、必然的に結果が生じたわけではない。そのため、結果に対する主語の関わりは弱い。(30)では his razor が dull になるのも、the pan が black になるのも必然的結果ではなく、目的語(存在構造)の出現への主語の関与は弱い。

次に自動詞であるが、再帰代名詞などの擬似目的語を取る場合、スキーマは同じく(31)になる。擬似目的語ゆえに、結果述語が現れないと非文になる。例を(32)に示す。

- (32) a. He laughed himself hoarse. b. He ran his sneakers threadbare. (b: 影山 1996: 212)

(32a)でも、存在構造が出現する。カテゴリー(himself)に属性成員 hoarse が内包され、存在構造になる。この出現に、主語が laughing することで弱く関わっている。(32b)も同じになる。

以上、結果構文における〈出現〉を見てきた。選択目的語か非選択目的語かの違いは、何が出現するか(目的語または結果述語)によって示した。動詞の意味から結果が推察されるかどうかは、主語の関与の度合いによって表した。動詞の意味から推察される場合、主語カテゴリーは二重線で表記され、推察が難しい場合、主語カテゴリーは破線で表記された。また結果述語が省略できるかどうかは、出現するものの違いで示した。結果述語が出現する場合、結果述語の出現自体がオプションなので、省略できる。一方目的語が出現する場合、結果属性を成員として内包しているため、結果述語を省略することができなくなる。〈出現〉における特性はすべて、カテゴリースキーマ(27)と(31)で表記が可能であることを見た。結果構文をカテゴリースキーマで表すことで、両者の違いが端的に表記できる。

なお(20a)(21a)(22a)のタイプに似ていながら、〈出現〉ではなく、〈移動〉の意味になるものがある。一つは、結果を前置詞句で表したものである。to 与格構文がそうであったように、前置

詞の働きにより、移動の意味が生じる。もう一つは、誇張表現である。誇張表現では、結果が実際のところ生じない。誇張ゆえに、単なる方向を指すにすぎない。この2つを次節で見ていく。

4.2 〈移動〉の意味

〈移動〉の意味は、(20b) (21b) (22b) (24)のタイプで現れる。この意味を持つのは、基本2パターンある。一つは結果述語を前置詞句で表現しているもの、もう一つは誇張表現である。

(33) a. She pounded the dough into a pancake. (= (20b))

b. He broke some grapes off the branch. (= (21b))

(34) a. The audience laughed the poor guy off the stage.

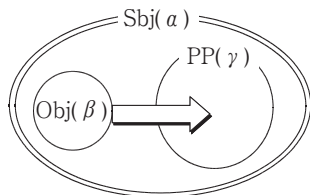
b. Frank sneezed the napkin off the table. (Goldberg 1995: 154)

(35) a. The joggers ran the pavement thin. (Levin and Rappaport Hovav 1995: 53) (= (24a))

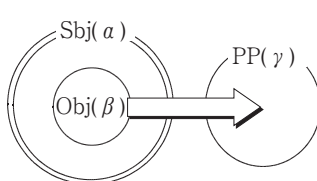
b. You shouldn't let him talk. He will talk your ear off. (影山 2001: 172) (= (24b))

(33)は他動詞、(34)は自動詞で、結果述語が前置詞句の例になる。一方(35)は、誇張表現の例になる。これらのタイプは、〈移動〉の意味を持ち、(36)のスキーマになる。

(36) a.



b.



(33a)では the dough が pancake の状態に、(33b)では some grapes が off the branch に移動している。(34a)では the poor guy が off the stage へ、(34b)では the napkin が off the table に移動することに、動詞の行為を通して主語が関与する。このときスキーマは(36a)のことも、(36b)のこともある。一方誇張表現(35)では、構文としてはスキーマ(27)になるはずであるが、誇張表現ゆえに結果が達成されない。誇張された結果に近いこと、それに向かっていることを表している。そのためスキーマは(36b)になる。目的語が、結果状態カテゴリーの成員になるのではなく、それに向かうという〈移動〉の意味になる。(35a)では the pavement が、結果状態カテゴリー(thin なものの集合体)の方向へ移動する。(35b)では your ear が off の状態へと移動する。

(36)ではどちらも、主語が移動に強く関与するので、二重線で表記されている。(36a,b)の違いは、主語が結果に関与していれば(36a)、関与していなければ(36b)になる。to 与格構文では(36b)タイプが優勢であったが、結果構文では(36a)タイプが優勢である。ただし(36b)が可能なことから、主語は必ずしも結果に関与しない。このことは(37)のように accidentally など付加できることから分かる。accidentally など付加された場合、偶然そういう結果になったことを示す。このとき主語は移動の結果に関与していないため、スキーマは(36b)になる。(37)で enter key がキーボードから外れたのは、主語が意図的にしたのではないため、結果に関与していない。

(37) I broke the enter key off my keyboard by accidentally punching it. (インターネット)

〈移動〉スキーマ(36)と、〈出現〉スキーマ(27)(31)には、決定的な違いがある。それは、カテゴリーと成員の関係が逆になっている。(36)では結果がカテゴリーで目的語が成員、(27)(31)では目的語がカテゴリーで結果が成員になっている。つまり主客が逆転する。〈移動〉スキーマで、結果がカテゴリーに、目的語が成員になるのは、前置詞により移動の意味合いが出るからである。結果となる属性は、出現することはあっても、別の場所から移動してくることはできない。移動できるのは、目的語である。目的語が移動し、PP(γ)という特性のカテゴリーで一成員になる。よって主客が逆転する。しかしここで重要なのは、〈移動〉であっても、目的語と結果に存在構造が成り立つことにある。

従来、結果構文で、結果部分が前置詞句と形容詞句のどちらかで区別して分析されることは少なかった。しかし本稿では、それらは意味が異なり、カテゴリースキーマが異なると考える*8。

4.3 純粋な自動詞と主語を叙述する他動詞

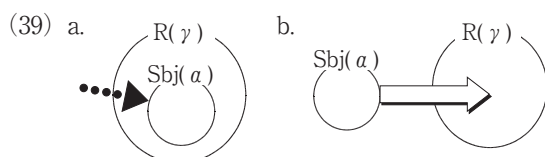
最後に主語が、出現や移動に関与しない用例を見る。まず目的語をとらない純粋な自動詞の場合、変化するのは主語になる。このとき主語は、この変化に主導権を持つことはない。(38)がその例で、(38a)では結果述語が形容詞句、(38b)では結果述語が前置詞句になっている。このときスキーマは(38a)に対しては〈出現〉スキーマ(39a)、(38b)に対しては〈移動〉スキーマ(39b)になる。

(38) a. The river froze solid.

b. John danced into the room.

まず(38a)であるが、カテゴリー R(γ) (solid なものの集まり)に、主語(the river)が個体

成員として出現する。この出現は the river が仕掛けたことではなく、あたかも自然とそうなった感がある。ここでは主語が存在構造の出現への関与がない。そのため(39a)で示すように、主語の関与カテゴリーがなく、存在構造だけのスキーマになっている。



一方(38b)のように前置詞句で表現されたものは、他動詞のスキーマ(36)と並行的である。前置詞があるため、移動の意味が生じている。しかしここでも主語が移動して結果が生じることに、主語自体が関与しない。ここでも意図せずして、そうなった感がある。単にそういう結果になったことを述べている。そのため(39b)に示すように、ここでも主語の関与カテゴリーがない。

ここで影山(2001: 160, 163)の例(40)(41)を見ていきたい。(40)は非能格動詞の例で、結果述語を付加すると非文になる。しかしこれに目的語として再帰代名詞を加えると、(41)のように適格になる。

(40) a. *They danced *tired*.

b. *The lecturer talked *hoarse*.

(41) a. They danced themselves *tired*.

b. The lecturer talked himself *hoarse*.

これもまた(39)のスキーマで説明される。(40)では主語の they や the lecture が、結果の出現に大きく関わっている。疲れるほど踊るかどうかは彼ら次第であるし、のどがかわるような話し

方をするのは the lecturer である。そのため(39)のスキーマと矛盾し、不適格になる。一方再帰代名詞の目的語がある場合、スキーマ(27)になる。主語は積極的に結果出現に関わるため、スキーマ(27)と合致し適格になる。

次に(39b)のスキーマをとる他動詞構文がある。(42)は結果述語が主語を叙述する例になる。(42a)で言えば、the wise men が out of Bethlehem という結果状態になったことを述べている。目的語の結果状態を述べているわけではない。この場合、主語の the wise men は、結果の出現に積極的に関与しているのではなく、知らずしてそのような結果になったことを表している。つまり following the star することで、主語が結果述語の状態になることを示している。これはスキーマ(39b)と合致するため、適格となる*⁹。

(42) a. The wise men followed the star out of Bethlehem.

b. He followed Lassie free of his captors. (Wechsler 1997: 313)

では主語を叙述し、不適格になる(43)との違いはなんだろうか。

(43) a. *I melted the steel hot. b. *I ate the food full/sick. (Simpson 1983: 144)

これは hot, full, sick が〈出現〉〈移動〉の意味を表さないことにある。つまり(43)の主語と補語の関係は、〈存在〉である。主語に一時的属性が成員として存在していることを意味する。そこには何の変化もない。移動の意味も出現の意味もないため、スキーマ(39b)と適合せず、不適格となる。

このようにしてみると、結果構文というのは、何かが変化してある結果を得ることを意味する。つまり最低でも、変化するものと結果状態が必要となる。これには2通り考えかたが生じる。一つは、変化物に新たに何らかの属性が生じると考える場合と、変化物が何らかの属性へと移行するという考え方である。これらの両方が、〈出現〉または〈移動〉のスキーマとして存在する。

4.4 身体部位名詞句と再帰代名詞の交替可能性

野中・貝森(2016)では、結果構文の目的語において、身体部位名詞句と再帰代名詞が交替可能か不可能かについて論じている。そこでの結論は、be 動詞を用いた表現でこの2つが交替可能であれば、結果構文でも基本交替可能となるが、非選択目的語結果構文が誇張表現の場合、交替が起りやすくなると述べている。しかしこの交替可能性については、上で述べたことから自然の帰結として説明することができる。まず交替が可能な例(44)－(46)から見ていく(野中・貝森 2016: 163)。

(44) a. He talked his throat hoarse. b. He talked himself hoarse.

(45) a. I cried my eyes blind. b. I cried myself blind.

(46) a. He talked his face blue. b. He talked himself blue.

(44)－(46)で交替が可能なのは、一つに部分－全体のシネクドキが可能かどうかにかかっている。(44a)で hoarseなのは his throat であり、(45a)で blindなのは myself であり、(46a)で blueなのは his face である。be 動詞を用いた表現で両方の表現が適格になるのは、部分－全体のシネクドキが可能であることを示している。(44a)で言えば、his throat という部分を、himself という

全体で置きかえることが可能であることを示している。よって(44)－(46)は置きかえが可能となっている。

しかし適格になるには、もう一つ条件を満たす必要がある。カテゴリースキーマの条件である。(44)は非選択目的語結果構文であり、結果述語は前置詞句でないため、(31)の出現スキーマをとる。属性成員 hoarse を持つ his throat や himself が出現する。一方(45)(46)は誇張表現となっている。cry することで blind の属性が、talk することで真っ青(blue)の属性が、出現しているわけではない。そのため(36b)の移動スキーマを持つ。cry や talk することで、blind や blue の方に属性が移動していることを示す。いずれにせよ、(44)－(46)ではスキーマに適合する意味となっているため、適格となる。

一方(47)(48)で交替ができないのは、一つに部分－全体のシネクドキがおこらないことと、一つにカテゴリースキーマに適合しないからと考えられる。

(47) I cried { my eyes /*myself } out.

(48) I laughed { *my head /myself } silly. (野中・貝森 2016: 165)

(49) a. He washed his hands clean. b. He washed himself clean. (野中・貝森 2016: 167)

(47)は誇張表現であるため、(36b)のスキーマを持つ。部分－全体のシネクドキがおこらないため、myself はそのままの[全体]の意味をもつことになる。私自身が out になるということは、あり得ないし、そういう意味ではない。そのため myself は不適格となる。(48)は誇張表現ではないので、(31)の出現スキーマになる。my head に silly が出現することはないので、これも不適格になる。また(49)では身体部位名詞句と再帰代名詞のどちらも適格であるが、意味が異なる。(49a)では手がきれいになるが、(49b)では彼自身がきれいになる。ここでは部分－全体のシネクドキがおこらないため、そのままの意味になっている。しかし(31)の出現スキーマに適合しており、適格な文となっている。

このように身体部位名詞句と再帰代名詞が交替可能かどうかは、部分－全体のシネクドキが可能かどうかに過ぎず、可能でなくとも4.1から4.3で述べたカテゴリースキーマに適合すれば、適格な文が作れることとなる。

5. SVOC 構文

結果構文における典型的表現は、SVOC 文型をとる。そこで SVOC 文型と結果構文の関係について考察したい。結論から先に言えば、SVOC 文型の方と結果構文は重なりはあるが、異なる意味を持つ。SVOC 文型は〈存在〉〈出現〉の意味を持つ。これを具体例を通して見る。このとき補語には、形容詞や過去分詞がくるものを中心に考えていく。(50)は〈出現〉、(51)は〈存在〉の用法になる((50)(51)は土屋 2014: 31)。

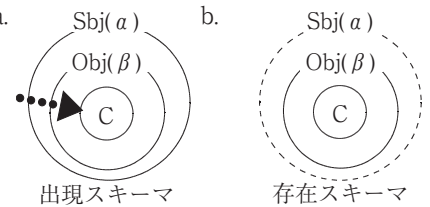
(50) a. He hammered the metal flat.

b. The committee elected him chairman.

(51) a. I found the body washed up on the shore.

b. Do you take your coffee black or white?

各々スキーマで示したものが、(52)になる。(52) a. a)が出現スキーマ、(52b)が存在スキーマになる。(52)は二重目的語構文のスキーマ(7b,c)と並行的である。目的語と補語が存在構造になっている。その存在構造をもとに、出現と存在の意味が生じる。その存在構造に、主語が動詞の行為を通して関与する。二重目的語構文のときと同じように、存在スキーマでは、すでに存在構造は存在しているので、主語の関与が弱い。そのため破線で表記されている。



具体的に見ていく。(50a)は結果構文で見た〈出現〉なので省略する。(50b)では chairman という属性成員が、カテゴリー him に出現している。一方(51a)では the body に、washed up on the shore という属性成員が存在していることを意味し、(51b)では your coffee に、black か white の属性成員が存在していることを尋ねている。

つまり二重目的語構文(SVOO)と、SVOC 文型はその構造において、重なりがあり、共有する意味〈出現〉〈存在〉がある。しかし意味のネットワーク上で、二重目的語は〈移動〉を基本義とし、〈出現〉〈存在〉と意味拡張するが、SVOC 文型は〈出現〉を基本義とし、〈存在〉へと意味拡張する。そのため両者は異なるものと解される。

SVOC 文型と結果構文の関係で考えれば、両者に共通するのは〈出現〉の意味である。SVOC 文型で結果構文はなぜ〈移動〉の意味を持てないのかということ、SVOC 文型に〈移動〉の意味がないからである。そのため結果構文で〈移動〉を表すときに、結果述語が前置詞句の表現をとることになる。SVOC 文型は〈出現〉から〈存在〉へ、結果構文は〈出現〉から〈移動〉へと意味拡張の方向が異なるため、一つの文型ですませることができなかったと考えられる。

なお SVOC 文型には、二重目的語構文と違い、存在構造が OC でないものがある。(52)では、存在構造をなしているのは主語と補語である。John に一時的属性 nude が存在し、その中で行為が起こる。これは nude の選択制限から、主語を叙述する解釈になる。nude は人を叙述するため、the meat と存在構造をつくることができない。そのため meat ではなく John の属性成員と見なされる。

(52) John ate the meat nude.

この主語を叙述する例は、〈存在〉から派生した意味と考える。結果構文には〈存在〉の意味がないため、この用法は結果構文にはない。主語を叙述する意味が結果構文にあったが、それは〈移動〉スキーマ(39b)の意味であって、〈存在〉の意味ではない。

このように結果構文と SVOC 文型は重なるところもあるが、基本別ものである。しかしその両者が合体すると、両者に矛盾しない意味が選ばれる。それが〈出現〉である。SVOC 文型の結果構文が〈出現〉の意味を持つのは、誇張表現を除いて、必然の結果だと考える。

6. まとめ

本稿では結果構文にカテゴリー分析を適用し考察した。ここでの結論は、結果構文は大きく3つの意味を持つとした。〈移動〉、〈出現〉、主語が関与しない〈移動〉〈出現〉である。この意味は、各々カテゴリースキーマで表記され、それぞれの意味の特性を明らかにした。こうした意味は、意味のネットワーク上に位置づけられ、派生の過程をたどることを可能にするとともに、関連表現との類似点・相違点を見いだすのに有効であると考ええる。

注

- *1. 高見(1997: 35)では、語彙的結果構文と論理的結果構文の2つに分類している。
- *2. 二重目的語構文でも、(i)のように所有関係を否定できる場合がある。個人による判断の違いとも考えられるが、この場合はスキーマ自体は(7)と同じであるが、causer カテゴリーの関与が弱くなっていると考ええる。つまりスキーマ上では実線ではなく、破線でカテゴリーが示される(cf 緒方 (近刊))
(i) John sent Bill the package, but he never got it. (Jackendoff (1990: 197))
- *3. 緒方(近刊)では、所有の含意を、存在構造に置きかえ、カテゴリースキーマで分析している。
- *4. 論を簡略化するため、二重目的語構文が持つ〈喪失〉の意味は省略されている。この〈喪失〉の意味は、〈出現〉から派生する意味で、〈出現〉の一種になるため、〈出現〉に含まれると見なす。
- *5. これ以外に先行研究において、軽動詞は〈出現〉の意味を表し、迂言的使役構文は〈出現〉の他者出現の意味を持つと分析している。
- *6. Murano(2009)では、Causality が英語の結果構文の意味拡張に重要とみなし、次のような Basic resultative を典型としている。これは本稿の考え方と異なる。
(i) a. They broke the window to pieces. b. John painted the wall red. c. She froze the jelly solid.
- *7. こうした存在構造は、前置詞の目的語と結果述語の間では生じない。
(i) a. He shot the bear dead. b. *He shot at the bear dead. (影山 2001: 160)
- *8. SVOC 文型で、補語が前置詞句と名詞句で交替する例がある。
(i) An MIT education made me (into) a linguist. b. An MIT education made a linguist out of me.
(Jackendoff 1990: 118)
前置詞がない場合は〈出現〉で、ある場合には〈移動〉の意味になると本稿では考える。結果構文に限らず、前置詞があるかないかで意味が変わると考えていく。
- *9. (42)は Levin and Rappaport Hovav(1995)で述べる直接目的語の制限(Direct Object Restriction)の反例になる。

参考文献

- Carrier, J. & Randall, J. H. (1992) "The Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives," *Linguistic Inquiry*, 23, 173-234.
- Goldberg, A. E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press: Chicago.
- Green, G. M. (1974) *Semantics and Syntactic Regularity*. Indiana University Press: Bloomington.
- Jackendoff, R. S. (1990) *Semantic Structures*. MIT Press: Cambridge, MA.
- Levin, B., & Hovav, M. R. (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. MIT Press: Cambridge.
- 加賀信広 (2012) 「二重目的語構文と与格交替」『構文と意味』, 澤田治美編, 49-68, ひつじ書房.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論: 言語と認知の接点』くろしお出版.
- (2001) 「結果構文」『日英対照動詞の意味と構文』, 影山太郎 (編), 154-181, 大修館.
- (2007) 「英語結果述語の意味分類と統語構造」『結果構文研究の新視点』, 小野尚之編, 33-65, ひつじ書房.
- 岸本秀樹 (2001) 「第5章 二重目的語構文」『動詞の意味と構文』, 影山太郎 (編), 127-153, 大修館.
- 三原健一 (2004) 『アスペクト解釈と統語現象』松柏社.
- 緒方隆文 (近刊) 「二重目的語構文と意味のネットワーク」『登田龍彦先生退職記念論集(仮題)』開拓社.
- Simpson, J. (1983) "Resultatives," In *Papers in Lexical-functional Grammar* eds. Lori Levin, Malka Rappaport and Annie Zaenen, 143-157, Indiana University Linguistic Club: Bloomington.
- 鈴木亨 (2013) 「構文における創造性と生産性」『山形大学人文学部研究年報』(10), 109-130.
- 高見健一・久野暉 (2002) 『日英語の自動詞構文: 生成文法分析の批判と機能的解析』研究社.
- 高見健一 (1997) 『機能的統語論』くろしお出版.
- 土屋 (年岡) 智見 (2014) 『英語構文体系の認知言語学的研究—二重目的語構文と関連現象—』, 博士論文, 京都大学.
- 都築雅子 (2004) 「行為連鎖と構文Ⅱ: 結果構文」中村芳久 (編) 『認知文法論Ⅱ』, 89-136, 大修館書店.
- Washio, Ryuichi. (1997) "Resultatives, Compositionality and Language Variation," *Journal of East Asian Linguistics*, 6, 1-49.
- Wechsler, S. (1997) "Resultative Predicates and Control," In *Texas Linguistic Forum 38: Proceedings of the 1997 Texas Linguistic Society Conference*, 307-322.
- Wierzbicka, A. (1988) *The Semantics of Grammar*. John Benjamins Publishing: Amsterdam.

(おがた たかふみ: 英語学科 教授)